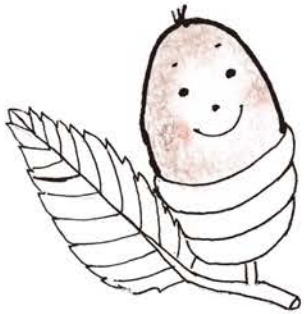
第４回ほしくま絵本原作コンクール最優秀作品

# どんぐりもりは いきてるよ

さく・え　のぐち　わき

ほしくま絵本文庫



シラカシ

スダジイ

トチノキ

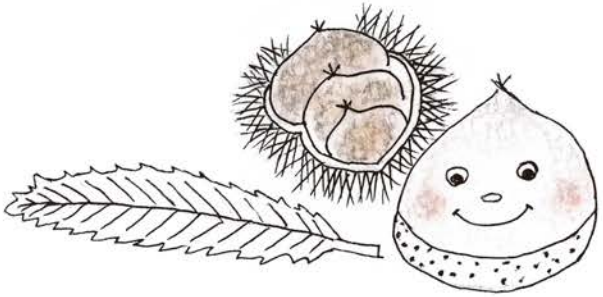
クヌギ

シイ

カシワ

コナラ

ブナ



クリ

# どんぐりの なかまたち

ミズナラ

# どんぐりもりは　いきてるよ

さく・え　のぐち　わき

「あれ、あそこ いろが かわってるよ。」

ほしくま メグレズは きがつきました。
いつも そらから しぜんをまもっているからです。

さっそく メラクと いっしょに おりて みることにしました。

「うぁー。これはひどい。」

どんぐりもりは きのうの あらしで
すっかりかわりはてた すがたでした。

どうぶつたちの いえも たべものも
みんな なくなって しまったのです。

たった いっぽんのこった ぶなのきの ねもとで
こぐまの ゴロちゃんたちが
ブルブル ふるえています。

「だいじょうぶだよ。
ぼくたちが たべものを
あつめて くるからね。」

と ほしくまたちが やさしく こえを かけました。

「ぼくたちも てつだうよ。」

と こがらや こまどり エナガたちも
いっしょに となりの ぶなもりへ むかいます。

ことりたちは あっち こっちと とびまわり、
ぶなもりから たくさんの きのみや、
くだものを あつめて きたのです。

「じゃあ どんぐりもりまで はこんでいこうよ。」

「さぁ、みんな いっぱい たべてね！！」
「わぁー ごちそうだ。いただきます。」

こぐまの ゴロちゃんは おなかが いっぱいになり
げんきを とりもどしました。

うさぎや りすや とりたちも
ほっこりした きもちに なりました。

ほしくまくんも ほっとしました。

ところが しんぱいがおの きつねが いいます。

「ぼくたちの どんぐりもりは もう かえって こないんでしょ？
もう ここには いられないんだよね、ぼくたち。」

「そんなことは ないさ、だいじょうぶ。
どんぐりもりは かえって くるさ。
みんなの ちからを あわせればね。」

と ほしくま メグレズとメラクは いいます。

「さぁ、みんなで おれた えだや きの かたずけから はじめよう。」

ほしくまくんは そっせんして おてつだい。
どんぐりもりは みるみる きれいに なって いきました。

「それじゃー、つぎは のこった きのみや くだものの たねを
みんなでまきましょう！！」

「それなら ぼくたちの でばんだよ。」と ことりたちも
どんぐりもりの あちら こちらへ たねを はこんでくれました。

どうぶつたちも がんばりました。

ここでも きつねが しんぱいがおで いいました。

「このたねが めをだして はが しげって みが なるのには
どれぐらい じかんが かかるのかなぁー。5ねん？ 10ねん？ 20ねん？
いやぁー。そんなに ぼく まてないよ。」

「そうだね。ぼくたち そのあいだ どうしたら いいの？」

ゴロちゃんたちも きもちが だんだん しずんで いきました。

みんなが ねしずまったころ、
ほしくまメグレズとメラクは なやみます。
「どうしたら いいんだろう。」

「そうだ ぼくたちのもっている ちからを
ぜんぶだそう。」

「うん、ほしくまの いのちの ひかりを どんぐりもりに
そそぐしかないよ。」と メグレズとメラクは こころを きめました。

そのよる みんなで まいたたねや きのみの 1つ1つに
「おおきくなれ　おおきくなれ」と こころをこめて
ほしくまの いのちの ひかりを そそいでいきました。

とうとう あさまで かかって やりとげました。

あさ めをさました こぐまのゴロちゃんは、
「わぁー。」と こえを あげました。

きのうまいた たねや きのみが
ふしぎなことに めをだし どんどん
おおきく そだって いるのです。

どんぐりもりが あっというまに
いのちを ふきかえして いるのです。

みんな おおよろこびです。
バンザーイ！！
よかった！！ よかったね！！

「あれっ。ほしくまくんが いないよ。」ゴロちゃんが きがつきます。
よくみると、ぶなの ねもとに よこたわっています。

「ぼくたち できることは ぜんぶやったよ。
でも もう ちからつきちゃったよ。
ここで ゆっくり ねむらせて。」

メグレズとメラクは そういいながら
ひかりが きえて
しぼんで いきました。

ゴロちゃんたちは
「いやだよ。げんきだして おねがいだから…。」
「ねぇ、だれか たすけてー。」と
おおきな こえで なきながら さけびました。

すると そらに すぅーと、にじが あらわれました。

その にじを わたって、
ほしくまの フェクダ、ドゥーベ、
アリオト、ミザール、
それに ベネトナシュが
やってきたのです。

「ぼくたちの なかまを むかえにきたよ。」
といって メグレズとメラクに
なないろの ひかりを そそぎました。

ふたりは
みるみる ひかりを とりもどし
げんきに なったのです。

そして にじを わたりながら、
みどり かがやく どんぐりもりを
なんども ふりかえ、ふりかえり、
そらに かえって いきました。

「ほしくまくん、ほんとに ありがとう。」
ゴロちゃんたちは おおきく てをふりました。

公益財団法人　星総合病院　公式キャラクター　ほしくま

メグレズ

ベネトナシュ

「ほしくま」７ひきは　いじわるな
キャンサー DX（でぃーえっくす）から
ちきゅうのこどもたちをまもるため
おおぐまざのほくとしちせいから
やってきた　ほしのせんし！
いつもこどもたちのしあわせをねがい
たたかっているよ

ミザール

フェクダ

メラク

ドゥーベ

アリオト

# 第２巻の発行によせて

この度、星総合病院第４回ほしくま絵本原作コンクールの最優秀作品「どんぐりもりは　いきてるよ」を絵本として出版いたしました。本コンクールは、平成26年に第１回目のコンクールを開催し１作目の絵本「しあわせあじの　しろいほし」を出版しましたが、その後の２年間もコンクールは継続したものの作品に恵まれなかったことから絵本を出版出来ずどこか寂しい気持ちでおりました。今回、やっと２冊目を、それもとてもすばらしい絵本を地域の子どもたちにお届けできることをとてもうれしく思います。絵本の良いところは、一冊の本を通じて子どもの豊かな感情や想像力などの醸成に役立つことはもちろんのこと、読んで聞かせるお父さんやお母さん、兄弟姉妹、周りの大人たちとのコミュニケーションツールとしてとても役立つところです。お母さんの膝の上に子どもが座り絵本を読み聞かせる姿を思い浮かべただけで幸せな気持ちになります。絵本の世界に親子で飛び込み、いろいろな体験や冒険をすることが出来るのです。読んで聞かせるお母さんはきっとお子さんの発想力や観察力に驚くことでしょう。そして、お子さんはお母さんのぬくもりや愛情を感じながら絵本の世界を旅することが出来るのです。インターネットが進化し様々な電子ツールが子どもたちの身近にある現在ですが、絵本には計り知れない可能性や魅力がたっぷりと詰まっています。

将来の地域社会を担うのは子どもたちです。私たちの住む地域が豊かで住みやすい社会になるかどうかは、それを支える子どもたちが思いやりのある心豊かな大人に成長するかどうかにかかっています。一人の子どもが成長するためには、親や家族の愛情や適切な学校教育、様々な社会的な支援などが必要です。一冊の絵本が子どもたちの成長にどれほど大きく影響することか、私たちはその可能性を信じてやみません。今回作り上げた「どんぐりもりは　いきてるよ」を多くの子どもたちが手に取り、大人たちと一緒にその世界を楽しんでくれることを期待しています。多くの皆さんに永くご愛読いただければ幸いです。

平成30年４月１日

公益財団法人　星総合病院

理事長　星　　北　斗

皆様の善意のご寄附で、私たちの絵本作成に関する事業をご支援ください。ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

＊ご寄附に関するお問合せ先　　公益財団法人　星総合病院　法人事業本部事務局　電話024－983－5511㈹

## ＊作者紹介＊

**のぐち　わき**

愛知県立芸大 デザイン科 卒業。東京都在住。
ミツバチの童話と絵本のコンクール 最優秀絵本賞。こころの絵本大賞 佳作。
絵本を描き始めて７年。これからも人の心に届く絵本を目指して描いていきます。


どんぐりもりは　いきてるよ　　作・絵　のぐち　わき

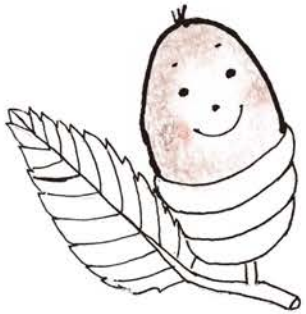
2018年４月１日　第１刷発行

発行者　星　　北　斗

発　行　所　公益財団法人　星総合病院
福島県郡山市向河原町159番１号
電話024-983-5511　FAX024-983-5588

印刷・製本　株式会社　日進堂印刷所

Printed in Japan



シラカシ

スダジイ

トチノキ

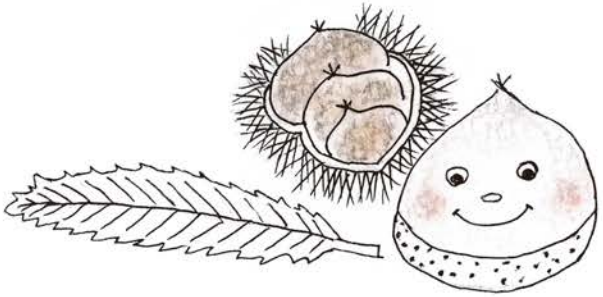
クヌギ

シイ

カシワ

コナラ

ブナ



クリ

# どんぐりの なかまたち

ミズナラ

公益財団法人　星総合病院　公式キャラクター　ほしくま

公益財団法人
星総合病院